

## 都市上海と日本人 — いくつかの断面—

奥田 尚

**林京子の上海旅行記** 林京子は、高等学校の国語教科書にも作品が採用されている、よく知られた作家である。林は一九三〇年（昭和五）八月、長崎市東山手町に生れた。父は三井物産に勤めており、上海に転勤したため、生後間もなく林も上海に移住した。四五年二月太平洋戦争での日本の敗戦がうわさになるころ、父を残して一家は上海から長崎県諫早市に引き揚げる。諫早は長崎市の西北西約二〇キロにあり、林は県立長崎高等女学校（長崎高女）に編入したために、一人だけ誕生地側近の長崎市十人町に下宿した。一四歳のことであった。



旧三菱兵器長崎工場跡地（現・長崎大学）  
と北側の三菱重工の寮

一年生相当以上のすべての学校の男女生徒は、純農村地帯では農作業、軍需関連工場が存在する地域では工場の労働に総動員された。夏休みなどというような時代ではなかった。

林たち長崎高女の生徒は、長崎市の三菱兵器工場に動員された。八月九日、工場の南一・四キロの地点の上空五〇〇メートルで、一一時二分に原爆がさく裂した。奇跡的に林は生き残った。林は七五年四四歳の時に被爆体験を「祭りの場」という作品として発表し、第七三回芥川賞を受賞した。林と原爆のことは本稿の目的ではないので、これ以上は触れない。

林は七九年四八歳のころから、少女時代を過ごした上海を題材にした作品の発表を始めた。八一年五〇歳で林は、上海から引き揚げてきて以来、三六年ぶりに上海を訪れる。八二年六月から翌年三月にかけて、この旅の記録を軸にした「上海」を発表し、八三年五二歳の五月に単行本『上海』を中央公論社から出版し、六月「女流文学賞」を受賞した。本稿で林の「上海旅行記」、「旅行記」と称するのは、この『上海』に『ミッシェルの口紅』を合わせたものが講談社文芸文庫から二〇〇一年に刊行されており、そこに所収された諸作品のことである。入手しやすい本なので、いちいちの引用作品名および頁数については、煩瑣をさけて省略した。

まず、文庫本冒頭の部分から紹介したい。

いよいよ上海に行く。パスポートはとった。コレラの予防接種も済ませた。種痘は化膿した。あとは八月九日、日曜日、十八時成田発上海行きのパンアメリカン航空機

一九四五年の長崎といえば、八月九日に原爆が投下された。八月なら夏休みではと思われるかもしれないが、四五年三月の閣議決定「決戦教育措置要綱」により、四月一日から翌年三月末日までの国民学校（昭和一六年四月から従来の小学校を、「皇道の道」に即した初等教育を行なうために「国民学校」と改名し、教育内容を変更した）初等科（従来の小学校六年生まで）を除き、学校における全授業の停止を命じ、「食糧増産、軍需生産、防空防衛」など「直接決戦に緊要なる業務に総動員す」と決定した。現在の中学

に乗ればいい。途中、墜ちなければ、八月九日の二十時すぎは上海だ。飛行機のドアが開く。タラップに立つ。上海の夜の空気が、全身を包む。張りのない私の髪は、上海特有の夏の夜の湿気を吸って、伸びきってしまうだろう。子供のころが、そうだったように。

具体的に上海行きがきまると、三十六年間の上海との隔たりは、一挙に縮まった。上海は、そんなに遠くなかった。

少し後に出てくるのだが、林がコレラの予防接種と種痘を受けたのは、旅行パンフレットに書いてあったからで、出発集合後に添乗員の青年が上海はどちらもないといっただとある。林の出発は八月九日であるが、これはおそらく林が意図的に選んだ出発日であろう。八月九日は長崎の原爆の日である。予防接種のことがパンフレットに書かれていたことについて、「規則は守るように躡られた。(中略)。疑ってみる知識のない事ごとは、疑う前に信じて守る。十四歳までに方向づけられた思考は、八月九日で断ち切ったつもりでいても、まだ、五十歳になった私を、支配している」と記す。

林は集合場所の東京シティエアターミナルに出かけ、上海―蘇州五日間コースに参加する見知らぬ人々と合流する。他にも直接に成田空港で合流する参加者もあり、合計で一八人に添乗員を加えると一九名のグループだった。アメリカの管制官のストライキのために、一時間二〇分遅れの一九時二〇分に出発したパンアメリカン機は、上海の虹橋空港に現地時間の二二時四〇分に到着する(ちなみにパンアメリカン航空、パンナムは外国旅行が夢だった時代の憧れで、誰もが地球儀にロゴを配したマークは知っていたが、九一年には倒産、消滅した。海外旅行の大衆化による運賃値下げ競争に敗北したためという)。

林はタラップを降りて、滑走路を歩いて建物に向い、幾段か階段を上り、その段数だけ階段を下りて待合室に入って、入国手続きをする。空港前のバスには「人民公社の公務員」の三二、三歳の「阮さん」という通訳の中国女性が待っており、延安西路の達華賓館がグループのホテルだと告げた。「中国の旅行は、目的地に着かなければ、ホテルもその日の日程も決まらない、と聞いてはいた」とある。

**上海虹橋空港** 九九年一〇月に上海の東海岸に広大な敷地を持つ「上海浦東空港」ができるまで、上海への空路の入り口は、上海市西部の内陸の「虹橋空港」であった。私が初めて上海へ行ったのは、阿頼耶順宏先生(本学名誉教授・本学科所属)の旅行団に加えてもらった八六年七月の三泊四日のツアーだった。阿頼耶先生が学外で開いておられた中国語教室の受講生中の希望者に混じって参加した。日本航空で昼過ぎに上海虹橋空港についた(この年の三月に全日空が国際線の運航を開始したが、中国線の就航は翌年)。虹橋空港に降りた時の湿度の高さと、練炭の匂いがまだかすかに記憶に残っている。林の上海ツアーは八一年だから、その五年後ということになるが、タラップを降りて歩いて待合室に入り、入国手続きをする点は変わらなかった。

このツアーのメンバーは中国語教室の受講生たちなので、メインプログラムは上海師範大学の学生との交流会であった。大学の教員と学生以外に、中国共産党のスタッフが三人、中国人教員とも阿頼耶先生ともいっさい話をする事なく、立ち会っていた。なんだかじっと監視されているような窮屈さがあった。相手をしてくれる中国の学生にプレゼントするために、文庫本を準備するよういわれ持っていったが、その本については特別に点検されるようなこともなかった。私の持っていった本は、田中康夫の『なんとなくクリスタ

ル』だった。もはや記憶にとどめている人は多くないだろうが、ブランド品を身にまとい、音楽とスマートな最高級輸入品の消費にあけくれる女子学生と、その周辺を漂う同種の男子学生の浮草のような日常が描かれている。

上海にはじめて行くにもかかわらず、私の中では上海は「酒とバラの日々」というイメージだったことから、この本を選んだに違いない。中国へはじめて行ったのは、この二年前の八四年のことで、その時は香港から出入りし、昆明とか桂林とかを旅行した〔この旅の記憶は「中国広州と北京の旅行記、昨今」(『学科年報』六号)に書いた〕。その時には、自分の記憶の中での幼い日々、四八年〔四五年八月が日本敗戦の年で、四八年は丹波篠山(現在の篠山市)で幼稚園に通っていた。そこでの記憶、藁草履をはいて、ツギのあたった服を着て、通園していた〕ころと、目の前の中国が酷似していることに驚いた。その一方で自分の幼少期の日本の貧しさを思えば、中国はすぐにも日本の「豊かさ」を追い越すだろうとも考えた。

中国語教室の受講生ではなかった私は、少し離れたところに座っていたのだが、たまたま人数の都合で、私にも相手をする学生が割り当てられた。丸顔で長身(ついでに言えば長脚)の女子学生で、昼間は工場で働き、夜間部に通っているとのことだった。工場の機械が日本製で、日本語が読めず、機械が止まった時に腹が立つので、日本語を勉強しているのだといった。まじめな彼女に『なんとなくクリスタル』はふさわしくなかったものの、それしか持っていなかった。その後、彼女は日本(東京)に留学し、帰国して大学の教員になったと聞いた。

**上海のキャラコ(木綿布)と在華紡** 林京子が八一年に上海を旅行したときは、五万円を両替して三七一元六角を、中国銀行の兌換券(外国人専用の紙幣)と中国人民銀行の人民券(中国人の使う貨幣)に両替してもらった。中国銀行の兌換券というのは「外 匯 券」と呼ばれていたもので、私の記憶では日本円との両替はすべて外匯券で、人民券はくれなかった。五万円で三七一元とすると、一元が一三五円くらいになる(ちなみに現在では一元一五円見当)。外匯券はほとんどが真新しいまるで「おもちゃの紙幣」なのに、釣り銭でくれる人民券はよれよれの使い古しのクズガミという印象が強かった。

中国語が使えないと、人民元では買い物ができず、外匯券での支払いを求められた。ところが林の場合は違う。林は一人で生地屋に入り、キャラコ(木綿の平織り生地)を買おうとする。

ウインドウの反物は、桃印のキャラコほど光沢はないが、中国産というだけで、母は満足してくれるに違いない。私は、薄暗い店内に入って行った。椅子に坐っていた三人の男が、椅子を立った。私はウインドウのキャラコをさして、チデワ、いくら、といきなり聞いてみた。両頬がふくらんだ年配の男が、イチメートルといって、中国語で値段をいった。私は、両替したばかりの兌換券を財布から出して、カードのように広げてみせた。男が首をふって、駄目だ、といった。そして財布のなかをのぞいて、二、三枚ある人民券をつまみ出して、コレという。素早く札の金額を合計して、タリナイといった。兌換券は通用する店と、受けつけない店があった。店を出て歩きながら、椅子を立てて迎えてくれた人たちの、穏やかな態度を私は考えていた。あれは、中国本来の習慣だろうか。身についた立ち居振舞いは、早くから欧米化されてきた上海の、一部の階層にいきわたっていた、旧時代の習慣のように思える。

文中に「桃印のキャラコ」とあるのは、おそらく日清紡のキャラコのことであろう。日清紡は、あとで触れる「在華紡」の一社であり、在華紡の典型的な展開都市は、上海と青島である。一八九四年（明治二七）日清戦争に勝利した日本は、翌年下関条約を締結し、中国の上海などの開港場に日本国民が「商業・住居・工業及び製造業」を開く権利を獲得した。しかし、当時の日本にとっては、日本自身での会社設立がようやく本格化する時期で、まだまだ海外へ資本を投下するほどの余裕はなかった。

上海での草創期の日本資本の紡績会社は、一九〇二年（明治三五）に三井洋行（三井物産）上海支店が経営不振の中国資本の「興泰沙廠」を買収し、「上海紡績有限公司」としたことはじまるといふ。三井洋行は一九〇六年には「三泰紡績」を買収、「上海紡績」と合併させ、「上海紡織」とした。ただし、「上海紡績」と「上海紡織」の会社名は、各種の文献で混乱しており、混用されているようである。

経済史の門外漢の私にとっては、「紡績」は綿花から糸をつむぐこと、「織布」は機織り、「紡織」は糸つむぎと織布の兼営というイメージがある。それぞれに「業」を付した会社名は、それぞれの専業会社であり、会社の実態はその名にあらわされると思っていた。一つには横光利一の小説『上海』からのイメージもある。『上海』は一九二五年（大正一四）の「内外綿紡績工場」での争議と、それから発展した「五・三〇事件」と、さらに六月一日から約三カ月にわたる「上海全市のゼネスト」を背景としている。

「在華紡」・紡績？ この「内外綿紡績工場」というのが曲者で、『上海』でも工場での騒乱場面での工場の機械類の名前は「糸つむぎ」に関係するものだけである。それもあって「内外綿」つまり「内外綿業株式会社」は、「紡績業のみの会社」と勝手に思っていた。しかも中国に進出した日本資本の綿業関連会社を「在華紡」（日本資本が中国で経営した紡績業）と略称することもあり、その一社の「内外綿株式会社」は、「紡績」つまり糸つむぎの専業会社と思っていた。



内外綿の上海での工場と社宅地図  
（『内外綿五十年史』より）

この地図は、上海に侵出する直前に「紡織業経営」をするため上海に侵出すると株主に説明している。したがって「在華紡」を日本の繊維産業の日本国内での過剰資本の投下先という意味で見れば、内外綿は決して代表ではなく、鐘紡など日本での工場展開が大きい会社が代表例になる。

『内外綿業株式会社五十年史』（一九三七年・同社）によれば、一九〇二年（明治三五）一月一四日定款を改正して営業目的に「綿糸紡績工業」を加え、同年七月一四日重ねて定

これは完全に私の誤解で、「内外綿株式会社」は、当初は綿花の仲買（対外輸出入も取り扱う）から出発し、すぐに「紡績業」を兼営、上海に侵出（といっても他の在華紡のように、日本に大規模工場を有した上での侵出ではなく、日本には小規模な工場しか持たず、生産のほとんどの中心を在華つまり中国の上海と青島の工場で行った）する直前に、「紡織業経営」をするため上海に侵出すると株主に説明している。したがって「在華紡」を日本の繊維産業の日本国内

款を改正して「織布工業」を加えたとある。また『同書』の折り込み地図「上海支店工場社宅分布図」には、上海の蘇州川沿いの小沙渡地区（現在の普陀区）に第一工場から第九工場が図示され、「第一工場（紡）」「第一工場（織）」とか「第七工場（紡織）」などと表記されている。綿糸の生産である「紡績」と綿糸を織って布にする「織布」の生産が、当初から兼営で行われていたようである。

ただし、織布は機械による大量生産に先立って、工場製の綿糸を使った農家の副業あるいは小規模な工場での生産が、布への多様な要望に応えるためには適切な段階がある。そのために機械での生産は、綿糸生産つまり「紡績」が先行した。そうして木綿布の品質としては、大規模工場での大量生産品の方が良質であったので、次第に機械による「織布」が盛んになったようだ。それで「紡績」ということばで、「紡績」のみならず「織布兼営」を含むことになったのかもしれない。

もう一点、三井物産など総合商社の方針に注目したい。在華紡のはじまりは三井物産の上海紡績にあるといわれるが、上海紡績を買収したのだから、三井物産が上海紡績（上海紡織）の経営に直接関与したと思われるが、そうではないらしい。代理店として原料の綿花の買い付け、綿糸販売、金銭の出納の代理を行ない、経営そのものに直接に関与することはなかったという。商品取引などに関連するリスクは背負うものの、会社経営のリスクを負うことを極力避けたい。上に記した「内外綿」も、上海での出発にあたっては「プラット社（在英国）製紡績機械」および付属品を三井物産に発注している。

林がキャラコ（木綿布地）を買おうとしたという記述から、少し離れたが、冒頭に記したように、林の父は三井物産の上海支店に勤めていたので、当時の三井物産の上海での事業展開のイメージを押さえておきたかった。

### 上海、内外綿の跡地と顧正紅記念館

『上海』で横光が描いた一九二五年五月の内外綿の争議（この年の二月にも大きな争議があった）は、第七工場で起きた。この一角には第五工場（『五十年史』の地図では一部に第一加工場との記載あり）、第六工場（記載なし）、第七工場（紡織）、第八工場（記載なし）の四工場が固まっている。一九二五年五月一日に労働者のリーダー顧正紅は、第七工場の日本人警備員に銃撃されて翌日に死去した。第七工場の壁面には一九七三年に大レリーフが描かれ、歴史陳列館も設けられたという。

内外綿は上海の蘇州川沿いに第一から第九工場を持っていたが、現在は跡地に高層住宅群が広がっている。内外綿の工場群のうち最後に解体されたのは、顧正紅射殺現場の第七工場で、山口東人のブログによれば、二〇〇六年一月に解体が始まった。〇八年一二月筆者は本学科の武田秀夫先生と一緒に、内外綿の第五～第八工場跡地付近を丹念に歩いてまわった。往時をしのぶものは完全になくなっており、高層住宅群となっていた。木之内誠編著の『上海・歴史ガイドマップ』によれば、顧正紅の像と歴史陳列館があるようなので、探したが見つけられなかった。

蘇州川沿いの宜昌路と江寧路の交差点の南東角で、二階建の長屋が解体処理中であったが、その一軒の二階から西側の江寧路をぼんやり見ている老人の姿があった。すぐ近くの取り壊し中の建物には、上海市普陀区房室土地管理局の「強制執行通知書」が貼りつけられていた。日付は二〇〇八年一二月二三日になっており、われわれの訪れた前日の日付であった。窓の老人は私たちに気づくと窓を閉めてしまったが、現住住宅を強制撤去する再

開発に、最後まで抵抗している一人なのかと思われた。このように政府決定に抵抗する人々もあり、それに対して「強制執行」が行なわれていることを知り得たのは、思わぬ副産物だった。今年一二年の三月に現場を訪ねたときには、すでに住居は強制撤去が終わったのであろう、高い塀に囲まれていて中の様子をうかがうことはできなかった。

またこの時、念には念を入れてとあって、<sup>アモイン</sup>澳門路を歩くと、立派な「顧正紅紀念館」が目前にあった。帰国後、同館について調べると、〇八年一二月の完成とあった。あれだけ丹念に武田先生と歩いたので見過ごすはずはなく、おそらく囲いか何かがされていたのであろう。同館のホームページでは〇九年一月一日「正式成立」とあるので、これが開館の日で、それまではやはり囲われていたのであろう。

「顧正紅紀念館」はその名の通り、顧正紅虐殺事件に関する展示がメインである。一九二五年虐殺事件とそれに続く「五・三〇事件」は、すでに触れたように、横光の『上海』の背景であるが、それだけにとどまらない。五月三〇日、顧正紅の虐殺に抗議するピラをまいた学生たちが、メインストリートの南京東路の西のはずれにあった「<sup>ラオナン</sup>老閘巡捕房（警察署）」に逮捕・連行された。この学生たちの逮捕に抗議して老閘巡捕房の前に集まった人々に対して、巡捕房のイギリス人署長の命令で、インド人警官らが発砲し、一〇数人が射殺され、数十名が負傷した。これに抗議して六月一日から上海市全域はゼネストに突入した（八月二六日に中止）。従来、学生が担ってきた反帝国主義運動を労働者が担うようになり、労働者階級による革命運動の展望が開けた画期とも評される。

林京子の<sup>ほんきゆう</sup>虹口公園 林の八一年八月の旅行記に戻ろう。

マイクロバスは再び街中に入った。行きとは違った道筋を走っている。おぼろげだが、道に見覚えがあった。広い四辻に出た。ロータリーがある。新公園ではないか。公園の表示を私はみた。虹口公園とある。やはり新公園である。むかし日本人たちは、新公園とも虹口公園とも呼んでいた。新公園は昭和七年四月二十九日に、上海公使だった重光葵が、韓国人の投弾によって片足をなくした公園である。公園は、日本人居留民の祝賀の場になっていた。紀元節、天長節、明治節、香港、シンガポール陥落と、上海じゅうの小中学生が集まって、祝賀の行進をした。式は退屈だったが、祝賀式の後、新公園で解散になった。私たちは芝生の公園を走りまわって遊んだ。季節と公園の雰囲気は、明治節のころが一番よかった。



虹口（魯迅）公園入口と魯迅紀念館入場券

紀元節は二月一日で現在では「建国記念の日」であり、神武天皇が橿原神宮の場所で即位した日として、一八七三年（明治六年）に制定された。天長節は「天皇誕生日」で、昭和の場合は四月二十九日にあたる。一九三二年（昭和七）のこの日、四月二十九日、天長節の祝賀と観兵式のために集合した上海派遣軍司令官白川義則（大将）、第九師団長植田謙吉（中将）、第三艦隊司令官野村吉三郎（中将）、上海駐在公使重光葵、上海総領事村井倉松、上海日本

人居留民団行政委員長河端貞次、同書記長友野盛らに対し、朝鮮の独立を要求する大韓民国臨時政府（上海に組織）の影響下にあり、日本による韓国合併（一九一一年）に反対する朝鮮人尹奉吉が爆弾で襲撃し、白川義則、河端貞次らが死亡、重光葵らが重傷を負った。

ただし、この事件は単独に起きたのではなく、前年の三一年九月一八日に関東軍が瀋陽（奉天）郊外の柳条湖で満鉄線路を破壊し、それを中国人の仕業として満州全土に戦線を拡大する「満州事変」を起こしたことが背景にある。二一日中国政府は柳条湖事件を国際連盟に提訴、中国各地に反日運動が活発となり、上海では二六日に十万人以上が参加する抗日大集会が開催された。上海は先に触れたように「在華紡」の進出と、それに対する抗日運動の素地がある。排日運動はすぐに拡大し、「日貨（日本商品）」排斥運動が盛んとなった。日本はそれに対し上海市長（中国人）に排斥運動の取り締まりを要求し、上海居留民団も中国人を攻撃するなど、日本と中国の緊張が急速に高まっていた。九月一日には上海抗日救国会が日貨の仲買業者の閉店を命令、一〇月三日、中国抗日救国会が対日経済絶交を決議し、違反者への罰則規定を設け、日貨の取り扱いを検査するようになった。

三二年（昭和七）一月一八日、在華紡の工場などのある楊樹浦地域（虹口の南の黄浦江沿い）で寒行を行っていた日蓮宗の僧侶らを中国人が襲撃し、一人を死亡させた（東京裁判での上海駐在公使館付武官田中隆吉陸軍少佐の証言では、田中少佐が関東軍などから得た資金により、買収した中国人に狙撃させたというが、田中証言を疑問視する意見も多い）。「日本青年同志会」は、中国資本のタオル製造会社の労働者が日蓮宗徒攻撃の犯人であるとして、同社の物置小屋に放火した。さらにその帰途に共同租界工部局（共同租界を管理運営する機構）の中国人警官と衝突して、一人を斬殺し数名を負傷させ、同志会側にも一名の死者と二名の負傷者を出した。関東軍が国際的に注目された満州から、諸外国の目を上海に向けさせるために、この襲撃事件を演出したともいう。日本は上海に軍隊を展開し、中国国民政府の最精鋭部隊の第一九路軍と一月二八日に衝突した。これが上海事変（第一次）で、三月三日まで激戦が続き、その後五月五日に上海停戦協定が締結された。

したがって尹奉吉が起こした爆弾事件は、上海事変の最中の出来事であった。そうした背景を考えれば、日本側に祝賀会場を厳重に警備する必要があったのに、さらに国際的関心を集め、日本人の愛国心を煽る目的で、わざと警備を手薄にして、事件を起させたとも考えられる。上海駐在公使重光葵がこの事件で片足を失ったことは、四五年九月二日に横浜沖の戦艦ミズーリ号上での降伏文書に署名した日本政府代表が重光葵であったことのエピソードとして、高校の日本史の授業で聞いた記憶がある。

林が「新公園」、「虹口公園」と書いているのは、現在の「魯迅公園」である。林によれば、「魯迅の墓は水飲み場からやや離れて、大空を背にして建っていた。一九五六年に、万国公墓から虹口公園に移された墓だという。生前魯迅は、虹口公園をよく散歩したといわれる。公園に移されたのは、そんな関係らしい。立派な墓である。白い石の台座の上に坐った魯迅は、像も墓も立派である」とある。

**林京子の自宅とその付近** 林の自宅は、虹口公園の南西一・五キロにはじまる呉淞路の一筋東の密勒路を少し南に下ったところにあった。「密勒路は、住人の九割が中国人だった。一、二年留守にした期間はあったが、私たち家族の生活の本拠は、密勒路にあった。労働者と、ほんのひとつまみの大金持ちと中産階級のもの住む、この街を介して、私は中国人の生活を知り、感情を知ったように思う。老太婆の借家がある路地の前の通りは、虹口

でも有名な、貧民窟だった。クーリーたちが住む貧民窟も老太婆の所有だった。老太婆が住んでいる私たちの路地には、比較的豊かな中国人たちが住んでいた。大工、豚屋、工部局の巡査、雑貨商人のお妻さんなど、職種はさまざまだった」とある。文中の「老太婆」とは、「グレート老婆」くらいの意味だという。「対照的に、吳淞路は日本人ばかりで街が形成されていた」とあり、「特に吳淞路は、味噌汁の香りと下駄音がしみついてきた街である」とある。林らのツアーバスは吳淞路を通り、三角市場・虹口マーケットの前を通る。

マイクロバスは三角市場、虹口マーケットの前に来ていた。私はカメラを構えた。マーケットは母のために、是非写して帰りたい。旧正月と新正月休みの数日をのぞいたほとんど毎日、買物に出かけていたマーケットである。母の生活記念塔である。私は続けざまに、シャッターを押した。シャッター音が、ことさら耳についたが、私は遠慮なく撮った。阮さんや何さんの表情も気になったが、段々と私は、上海に慣れつつあった。

レンズを透してみるせいか、虹口マーケットが小さくみえる。シャッターを押しながら私は、幾度も肉眼でみなおしてみた。やはり虹口マーケットは、小さくみえた。子供のころには、コンクリートの島のように見えた。西洋人向けのダンスホールや、ビリヤードの遊技場があった二階に、板戸を打ちつけた窓があった。

三角市場は一八九一年に開設された工部局の公設マーケットにはじまり、東洋一の規模を誇ったといわれる市場であったが、一九九七年に取り壊された。三角市場は文字通り三角形で、ほぼ東西方向の塘沽路（旧の文路・文監師路）、北北東方向の漢陽路（旧の漢璧礼路）、ほぼ南北方向の峨眉山路（旧の密勒路）に囲まれている。塘沽路と漢陽路の交差点は、吳淞路とも交差する。

三角市場の文路（塘沽路）と吳淞路の交差点の西側すぐに「日本人倶楽部」があった。大正期の観光案内書『新上海』によれば、日本人倶楽部は上海在留日本人の社交機関であり、当初は静安寺路にあり、一九〇三年（明治三六）この付近に移転し、一九一二年（大正元）二〇万ドルの借款により上記の土地を購入、二年後の一四年三月に落成した。日本は一九一〇年（明治四三）韓国を合併したことや、この建物の完成などから好景気のように見えるが、そうではない。一九〇四年の日露戦争の軍事費は、欧米に国債を購入してもらい調達したために、その利払いを行なう必要があった。加えて重工業部門はようやく産業革命段階に到達したとはいえ、先進機械類については輸入せざるを得ず、巨額の赤字を抱えて国際収支上危機的な状況であった〔日本が爆発的な好景気を迎えるのは、一九一四年（大正三）七月から一九一六年六月までの第一次世界大戦の期間のことであり、一四年の一億円の債務国から、二〇年には二七億円以上の債権国となったとされる〕。日本本土の不景気の中でも日本人倶楽部が建設されたのは、在華紡のさらなる発展のために、上海の日本人たちの拠点が必要とされたためである。倶楽部は四階建てで、一階には居留民団の事務所（三二年に一筋北の崑山路に移転）、図書室、玉突場、酒場などがあり、二階は応接室、食堂、商業会議所事務室、三階には演舞場や日本室があり、四階は寄宿室になっていた。

一階に事務所があった上海居留民団の組織は、議決機関の居留民会（毎年三月に総領事が招集）と行政に類似する行為を処理する行政委員会とから成り立っていた。居留民団の事業として重要なものは、学校の経営と維持であり、林京子の通っていた「第四国民学校（旧の中部日本尋常小学校・建物は現存）」は、二九年（昭和四）に民団が創立したものである。林が小学校卒業後入学した上海の日本第一高女は、二三年に民団が魯迅公園の東南



そばの山陰路（旧の施高路）に設立し、三六年に欧陽路（旧校地の少し東）に新築移転した（林の通学したのは後者）。

**日本人倶楽部の周辺** 倶楽部の前の文路を西へすぐのところには、有名な日本料亭の「六三亭」があった。陳祖恩によれば、長崎生まれの白石六三郎は一八九八年（明治三一）文路に面する北側に「六三庵」という日本式の麵屋を開き、それをもとに一九〇〇年料亭「六三亭」を開業した。木之内の『歴史マップ』には、六三亭の隣には一八九五年創立の「工部局女学校（建物は現存）」が載せられており、文路をはさんだ南側に「トルコ風呂」という記載がある。木之内は「北四川路、乍浦路界限には、20年代までは白系ロシア人の経営



する娼館が多かったが、上海事変後は日本の芸者置屋や飲食店などの風俗営業が増えていく」とし、横光の『上海』から引用する。文中の参木は主人公、甲谷はその友人である。「この豚屋と果物屋の間から、トルコ風呂の看板のかかった家の入口までは、歪んだ煉瓦の柱に支えられた深い露路が続いている。参木と逢うべき筈の甲谷はそのトルコ風呂の湯気の中で、蓄音器を聴きながら、お柳に彼の背中をマッサージさせていた。」

二〇一二年にこの付近を歩いた時には、崩れかかった長屋風の建物が残っていた。上海歴史博物館の「トルコ（土耳其）浴室」の看板の入口階段のところにチャイナドレスの女性がいる復元建物と、何となく雰囲気はよく似ていた。

**上海歴史博物館の復元展示** もっとも、現状では崩れかけの長屋は、明るい道路に面しており、横光が描いたような「深い露地」ではなかった。

林京子の作品にも似たような記述がある。

〔子どもたちの〕遊びの基点になっている消火栓は、並木道よりも一段高い、歩道に備えてあった。この消火栓からは、いつも水滴がしたたり落ちていた。そのため消火栓のまわりは晴れた日でもしめっており、消火栓とアスファルト道の僅かな隙間に、雑草が生えている。その前に、白系ロシア人の女主人が経営する、娼婦の家がある。私たちはヤァチイの家と呼んでいた。ヤァチイとは娼婦のことである。娼婦の仕事は、勿論私にはわからなかったが、ただ時々、真夜中に、日本陸戦隊の巡邏兵に追われた水兵たちが、路地の家の屋根を伝って、私の家に逃げてくることがあった。水兵たちは、ヤァチイの家から逃げてくるのである。路地の家の造りは同じで、家と家の間隔は最も近い場所でも二米はある。水兵たちは、二米もある闇の空間を飛び移って四、五軒先にある私の家まで逃げてくる。

私の家に逃げてくるのは、日本人の住いと知ってではなく、ヤァチイの家から四、五軒目にある、隠れるに都合がいい位置にあるからだった。女と寝ている部屋に踏み込まれた水兵たちは、女たちが巡邏兵ともみあっている隙に、下着一枚で、窓から逃げ出してくるらしかった。屋根伝いに逃げてきた水兵たちは、屋上でうずくまっている。

時には林の両親が屋根に上って、うずくまっている水兵を部屋にかくまったりもした、ともある。

福士由紀「娼婦」によれば、中国共産党の四九年以降の政策で、上海の娼婦は婦女労働教養所に強制収容され、職業教育・階級教育・性病治療ののち家族のもとに戻るか工場へ配置され、娼家は強制封鎖されて、五〇年代末には姿を消した。しかし七八年の改革・開放政策以降に再び出現し、九一年には全国人民代表者会議で「買売春を厳禁する決定」が採択され、罰則の厳格化や取り締まりの強化がおこなわれているという。

**まとめにかえて・林京子の旅行記の友誼商店** 林の旅した八一年八月、黄浦江沿いのバンドの友誼商店は、旧英国領事館を転用したもので、ガーデンブリッジ（外白渡橋）のそばにあった。ガーデンブリッジは一九〇七年に架橋されたもので、現在のものは二〇〇九年四月に補修再架橋された。二〇一〇年には黄浦江の対岸の浦東で万博が開かれ、それに合わせての補修であった。林はガーデンブリッジのそばの友誼商店が旧の英国領事館とわかると、商店での買い物に当てられている一時間に、そこを抜け出して黄浦江を見る決意をする。旅の間のホテルで同室に割り当てられた小村という女性を誘って、友誼商店を抜け出す。

この旧英国領事館の友誼商店を、私もなかば強制的に見学させられたことがある。八七年と九〇年の本田濟先生（故人・中国哲学研究者で当時は梅花女子大教授）の旅行団のツアーでのことだった。林の訪れた友誼商店は領事館の一部の転用だったが、同じ敷地内の少し離れた場所に八四年に六階建てで新築されたというから、私が見学したものは後者である。林は友誼商店を抜け出した。文中の「阮さん」はすでに記したように通訳兼案内係の女性である。

ちょっと門の外に出てもいいでしょうか、出かかった言葉を、私はのみ込んだ。上海友誼商店は、旧時代の英国領事館である。塀の外は、バンドの通りである。門を出て、通りをまっすぐにつつきれば、パブリックガーデンである。パブリックガーデンの岸辺は黄浦江。高潮の日には、公園の散歩道に黄浦江の波が押し寄せる。十五分あれば門を抜けて、通りを渡り、黄浦江をみて、友誼商店に戻ってこられる。許可を出れば、阮さんは許してくれるだろうか。駄目デスネ、と阮さんは笑って断るだろう。責任上当然だ。駄目デス、と断られれば、阮さんの命令は守らなければならない。無断で林と小村は友誼商店を抜け出し、パブリックガーデンを少し南に下り、左に折れて黄浦江の堤防に着く。

堤防に寄りかかった大勢の中国人たちの頭の向こうに、茶褐色の流れがみえる。小村の腕をつかんで、これが黄浦江なの、と私はいった。ふーん、と小村は小さいあごを上げていい、濁ってるう、といった。濁ってなんかいない、もともと黄浦江はこれなのだとは独り言をいい、中国人の間にはさまって、堤防に胸を押しつけた。そして両手で、堤防を抱き寄せるように、胸に引き寄せた。熱いコンクリートの肌が、ブラウスの胸に軋み、太陽の暖かさが、胸の奥深くにゆっくり広がっていった。岸辺の隅々まで、茶褐色の水はうるおし、入り組んで流れていた。黄浦江は変わっていなかった。建物も街並みも、生臭い風の匂いも、子供のころと変わりがなかった。三十六年の空白があったことが、私には信じられなかった。だが十四歳だった私が、五十歳を過ぎている。年月は確かに経っていた。しかし何と、微々たる空白の証しだろうか。

土産物などほとんど買い物をしない私にとって、当時必ず組み込まれていた友誼商店の見学は、なんとも退屈でやりきれない時間だった。九〇年の時には、思い切って無断で商

店を出て、パブリックガーデンまで行った。だが林のように黄浦江に強い思いがあるわけではないので、黄浦江沿いのバンドを南下して、和平飯店の前から、来た道を引き返した。上海を好きになったのは、このちょっとした「自由行動」の時に感じた、何ともいえない「開放感」のせいなのかもしれない。

〔参考文献〕

- \* 『内外綿業株式会社五十年史』（一九三七年・同社）
- \* 木之内誠『上海 歴史ガイドマップ』（一九九九年・大修館書店）
- \* 小野和子「旧中国における『女工哀史』」（『東方学報』五〇・一九七八年）
- \* 山口東人のブログ： 2006年01月12日「上海の平野勇造 その1 内外棉」<http://blog.livedoor.jp/guen555/archives/50343802.html> など。
- \* NHKドキュメント昭和取材班『上海共同租界』（一九八六年・角川書店）
- \* 丸山昇『上海物語』（一九八七年・集英社／参照した本は二〇〇四年・講談社学術文庫）
- \* 高橋孝助・古厩忠夫『上海史－巨大都市の形成と人々の営み－』（一九九五年・東方書店）
- \* 陳祖恩著・大里浩秋監訳『上海に生きた日本人・幕末から敗戦まで』（二〇一〇年・大修館書店）
- \* 陳祖恩のブログ類： (<http://gd.shwalker.com/shanghai/contents/serialize/200511/index.html> など)
- \* 『新上海』（一九一八年・上海日本堂書店）
- \* 福士由紀「娼婦」〔菊池敏夫・日本上海史研究会編『上海・職業さまざま』（二〇〇二年・勉誠出版）〕